

琉球大学学術リポジトリ

児童の発言を引き出し・活かす授業づくり

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比嘉, 栞菜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019872

児童の発言を引き出し・活かす授業づくり

Designing Classes to Elicit and Use Children's Statement Effectively

比嘉 葉菜

Kanna HIGA

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

1. はじめに

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）において「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。筆者は、児童が主体的に学ぶためには児童の発言から授業をつくることが重要だと考える。片山・若松（2019）は、「自分の思いを自分自身で言葉にしようとするのが大事」とし、「子どもに問い、子どもから言葉を引き出すことで、一人ひとりに思考の言語化を促すとともに、自分が主人公だと実感させることができます」と述べている。このことから、児童の発言を引き出し子どもの言葉から授業をつくることで、児童が主体となり学びに向かう姿につながっていくと考えられる。

筆者のこれまでの授業実践においても児童の発言を授業に取り入れるよう心がけてきたが、自分の意見をなかなか言おうとしない児童やノートに答えを書いているにもかかわらず発言することをためらう児童の姿などがしばしば見られた。さらに、挙手した数名の児童の発言と筆者の説明を中心に授業を進めてしまい、主体的な活動を促すといった授業展開が十分に行えず、授業づくりでの課題となっていた。

そこで本研究では、児童の発言を引き出すことに重きを置き研究を進めることとした。そのため、まずは、児童の発言を引き出すための手立てを授業に取り入れる際の視点で整理する。そして、整理した視点をもとに児童の発言を引き出す手立てを取り入れた授業を行い、発言を活かしていくことで児童が主体となり学びに向かう授業づくりを目指すことを目的とする。

2. 研究の対象と方法

(1) 研究時期と対象

① 2021（令和 3）年度課題発見実習

9月（2週間）公立 X 小学校 第 6 学年 授業観察と担任教師による手立ての整理

2月（2週間）公立 Y 小学校 第 5 学年 国語「想像力のスイッチを入れよう（全 6 時間）」

② 2022（令和 4）年度課題解決実習

5月（2週間）公立 Y 小学校 第 5 学年 社会「自然条件と人々の暮らし（全 6 時間）」

9月（2週間）公立 Y 小学校 第 5 学年 社会「自動車の生産にはげむ人々（全 8 時間）」

(2) 研究の方法

理論研究や課題発見実習を通して、「児童の発言を引き出す工夫」と「発言を活かす工夫」を整理する。そして、課題解決実習において、児童の実態に合わせた手立てを取り入れた授業実践を行い、児童の反応や事後アンケートの結果から手立ての効果を考察する。

3. 研究の内容

(1) 発言を引き出す工夫

① 理論研究

児童の発言を引き出すためには、児童が発言しやすい雰囲気をつくる必要があると考える。阿

久津 (2012) は、つぶやきを増やしていくための方法の一つとして「つぶやき返し」を提案し、「オウム返し」で言葉を繰り返すことで、相手の話しやすい環境を整える効果があり、さらに共感（興味をもってよ）とリスニング機能（聞いているよ）というメッセージを加えると、オウム返しだけのときよりも内容が広がっていくとしている。そして、「聴いているよ。気にかけているよ」というプラスのメッセージを送り続けることでつぶやきが聞こえ始めるとしている。また、教師の立ち位置を変えることで『子どものつぶやき』を拾いやすくなる」と述べている。以上のことから、児童の発言を積極的に拾い肯定的な反応を返すことで児童が安心して発言できる環境をつくり、学びに向かう力になると考える。また、片山・若松 (2019) によると、間違いがあったからこそ、より深く学ぶことができたことと価値づけすることによって、子どもたちはお互いの意見を大事にしようと思うようになり、わからないときに「わからない」とはっきり言えたり、間違っているかもしれないでも自分の考えをきちんと伝えたりすることができるようになるという。つまり、児童に発言する意義を実感させることも児童の発言意欲につながると思われ、本研究では、つぶやきを活かし、発言することの意義を実感させることに着目したい。

② 発言を引き出す手立てを取り入れる視点 (2021 年度課題発見実習)

上述した理論研究をもとに、2021 (令和 3) 年度課題発見実習 9 月実習では、協力学級の担任教師 T (以下、教師 T) の授業観察と手立ての分析を行った。TC 記録等の結果から、教師が頻繁に机間指導しながら児童の発言を拾っている様子や近くにきた教師に質問している児童の姿がみられた。これは、教師が児童に近い距離に立つことで、安心して発言できる状況ができたのではないかと考えた。また、教師が積極的につぶやきを拾い肯定的な反応や言葉がけをする様子が見られた。これは、上述した“共感とリスニング機能” (阿久津 2012) として捉えられると考える。このことから、教師が児童に近い距離に立ち発言を拾うこと、肯定的な反応や言葉がけなどを行うことを 安心感を持たせる という視点に整理することにした。また、的確な指示や発問を出すことで、児童に学習課題を捉えさせる様子が見られた。児童が意欲的に取り組み、考えを持つことにつながっていたのではないかとと思われる。また、児童が自分一人で考える時間を保障することで自分の考えを持たせていた。児童が考えを表現する過程において、考えを持つということも重要になってくると考えられることから、考えを持たせる という視点もおくこととした。教師 T への聞き取りからは、意図的指名を通して児童に自信を持たせるための工夫をしているということがわかった。他にも児童の考えを価値づける場面がみられ、それに対して普段自分からはあまり発言しない児童が発言する様子が見られた。これらをまとめて、自信を持たせる という視点に整理する。さらに、発表や発言する意義を伝えることで児童の発言意欲につながったという話もあった。授業でまちがいを取って取り上げ、なぜ違うのかみんなで考えたり、今後活かしていくための大切なまちがいであると児童の考えを価値づけたりする様子も見られた。学級の様子からも、片山・若松 (2019) の言うようにお互いの考えを受け入れ、間違えても考えを伝えることが大切であるとする考えが定着しているように感じた。そのため、間違いや児童の考えを価値づけたり、発表や発言する意義を伝えたりすることなどを 発言することの意義を実感させる という視点に整理した。

2 月実習では、9 月実習でみられた手立てを参考に授業実践を行なった。特に、児童の発言を復唱し肯定的な言葉がけを行うことを意識すると、周りの児童の発言が増えていく様子が見られた。また、他の教師の授業を観察するなかで、教師 T の授業でみられた手立てと似たような関わりがみられた。

課題発見実習でみてきたことを踏まえ、児童の発言を引き出す工夫の視点を整理する (表 1)。なお、視点①から③は、児童が自分の考えを持ち発言

表 1 発言を引き出す工夫の視点と手立ての例

視点	手立ての例
①考えを持たせる	・明確な指示と発問をする ・児童が自分一人で考える時間を保障する
②安心感を持たせる	・頻繁に机間指導をしながら発言を拾う ・積極的に肯定的な反応や言葉がけを行う
③自信を持たせる	・児童の発言を価値づける ・意図的に指名する
④発言することの意義を実感させる	・発表や発言することの意義について話す ・児童の発言を価値づける

するまでの流れと教師が関わる順を意識して並べた。視点④については、さまざまな場面で意識しておく必要があると考える。また、課題発見実習の授業観察でみられた手立てや授業実践で取り入れた手立てのなかからいくつか例を示した。

2年次の課題解決実習では、表1にまとめた発言を引き出す工夫の視点をもとに児童の実態に合わせて手立てを取り入れていくことにした。

(2) 発言を活かす工夫

“活かす”という言葉は、活用する、役立てるという意味で使われる。そのため、本研究では、発言を活かすことを「児童の発言を拾い、授業のねらいにつなげていくこと」として捉える。

石井(2008)は、生徒が主体的に発言することによって参加し、生き生きとした授業にする要因の一つとして“ねらい”を明確にしておくことを挙げている。つまり、児童の発言を活かすためには、授業者が“ねらい”を明確にしておくことが重要であると言える。また、志水・神田(2000)は、教師が子供の発言をつかみ・切り返す能力をCatch&Response能力とし、算数の問題解決型授業において、子供の発言に対する教師のキャッチ&レスポンスこそが、授業を問題解決型へと転換させる要であり、なおかつ授業が子供主体となっていく決め手であると考えている。そして、実践をもとにキャッチ&レスポンスの手順を5つの段階に整理している(表2)。筆者は、表2の手順は全ての授業において児童の発言を活かしていくうえで活用できるものであると考える。本研究では、これらを子どもの発言を活かすための方法の一つとして捉え実践を行い、手立ての効果の授業分析の指標としても取り入れることとする。

表2 キャッチ&レスポンスの手順

段階	キャッチ&レスポンスの手順
段階①	「なるほどなあ」と子供の思いをすべて受け入れる段階
段階②	子供の言葉をそのまま復唱する復唱法を行う段階
段階③	「そこがいいね」と認めてあげる段階
段階④	子供の考えた真意を明らかにする段階
段階⑤	子供の発言に対する教師の切り返しの段階

4. 授業の実際と考察(2022年度課題解決実習)

2022(令和4)年度の課題解決実習では、公立Y小学校第5学年の3学級を対象に、5月と9月の2週間ずつに分けて行った。科目の選定については、児童の発言を引き出す際に、考えや予想など幅広い意見を受け入れることができると考え、社会の授業で実践することにした。なお、それぞれの学級の実態に極端な違いが見られたため、ここでは学級の児童同士の関係性など学級の状況にあまり左右されないB学級を取り上げることにする。

(1) B学級の実態(男子17名、女子18名、計35名)

① 授業観察と教師への聞き取りから

5月実習での授業観察や授業実践からみえてきた児童の実態として、忘れ物をする児童がほとんどおらず、教師の指示がスムーズに通じ、集中して話を聞くことができる児童が多い。他の学級の教師の話からも学習規律が徹底されている学級であると思われる。ペアやグループでの活動では、活発に発言し男女構わず協力して活動する様子が見られる。全体の場ではつぶやきはあるが、発表場面になると自ら手を挙げる児童は3、4名ほどで、決まった児童が中心に発言している様子がよく見られる。

② 発言に関するアンケート調査の結果

5月実習の初めの週(5月19日)に発言に関するアンケート(授業中に「発言しやすいとき」と「発言しづらいとき」について記述で答える)調査を行った。出席していた児童29名の記述を内容ごとに分けた結果、51個の回答が得られた。また、「発言しやすいとき」と「発言しづらいとき」の両方に共通するキーワードが多くみられたため、内容ごとに分類し表にした(表3)。なお、「発言しやすいとき」の意見の記述例は(+),「発言しづらいとき」は(-)で示している。アンケート調査の結果から、「考えをもつ」に関する記述が最も多く、答えが分かったり、自分の考えを持ったりしたときに発言しやすいと感じていると考えられる。続いて、「聞く姿勢」「聞き手の人数」の順に多いことから、周りの環境に

左右される児童も多いことがうかがえる。「聞く姿勢」のなかに、「頷いてくれたり」という他者の反応に関する記述などもあることから、受容的な雰囲気があると発言しやすいと感じる児童がいることもわかる。

③ 実態に合わせた手立ての視点

上述したことから、B学級では、自分の考えを持っているときに発言しやすいと感じる児童が多いことがみえてきた。また、「聞く姿勢」に関する記述にみられるように聞き手の受容的な姿勢を求めていることや全体の場では決まった児童が発言している様子から、全体の場においても児童が安心して発言できるよう

な手立てが重要になるのではないかと考える。そこで、発言を引き出す手立てを取り入れる際には、「視点①自分の考えを持たせる」と「視点②安心感を持たせる」を特に意識する（表1参照）。

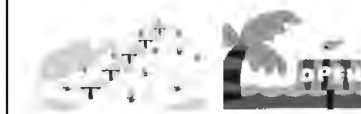
(2) 5月実習（2022年度課題解決実習 5月16日～27日）

① 特に意識して取り入れる手立て

A) 発言を引き出す工夫

児童の実態を踏まえ、発言を引き出す工夫の視点（表1参照）を意識して児童に合わせた手立てを取り入れることにした。ここでは視点①「考えを持たせる」における手立てのみを取り上げる（表4）。

表4 5月実習における発言を引き出す手立ての例

視点	手立て	○目的	例
①考えを持たせる	(1) 視覚的な教具	○イメージや考えを持たせるきっかけをつくる ○気づきやつばやきを増やす	イメージ：4月の北海道（スキー場）と沖縄（海開き）  ※授業では実際の写真を使用しました。
	(2) 興味関心を引く	○考える意欲につなげる	・砂糖の原料である「甜菜（てんさい）」について、漢字からどのような植物か予想させる

「視点①考えを持たせる」では、まずはイメージを持たせることが必要であると考え。宮坂（1972）は、「人間の知覚が主として視覚的性格を有していることから、視覚的教具・教材が教授の有効な手段として広く利用されている」と述べている。このことから、児童の理解を促し考えを持たせるうえで有効ではないかと考え、視覚的な教具を取り入れることとする（手立て(1)）。また、考える意欲につなげるための手立てとして、クイズなどを取り入れ、興味関心を引くことを意識する（手立て(2)）。

B) 発言を活かす工夫

発言を活かす工夫として、キャッチ&リスポンス（志水・神田 2000）を取り入れていくため、まずは児童の発言を丁寧に拾うことを心がける。さらに、発言を復唱したり、肯定的な反応を返したりすることで発言を引き出す工夫の視点②「安心感をもたせる」にもつなげたい。また、発言を活かす際はねらいを意識して児童の発言を取り上げるようにする。

② 児童の反応と考察

5月実習では、児童の発言を引き出すことはできたが、上手く発言を活かすことができなかった場面が多くみられた。そこで、それぞれの工夫の結果を各々で分析し考察した。

A) 発言を引き出す工夫

手立て(1)視覚的な教具では、板書用の写真やデジタル教科書の画像などを使用した。一例として、寒い土地の暮らしについて学習する際、北海道の気候をイメージさせるため、導入において北海道と沖縄の4月の写真（表4参照）を比較して「住む場所を選べるならどちらがよいか」考えさせる場面をつく

った。児童から、北海道の気候について「雪が積もってさ～ドアが開かなそうだし」という発言があり、それに対して「たしかにな～」、「逆に沖縄、暑い！」などという反応などがみられた。北海道では雪が積もるというイメージ、沖縄は4月でも暑いというイメージを全体に共通して持たせることができたのではないかと考えられる。このように、視覚的な教具を用いることで、児童にイメージを持たせたり、児童の気づきやつぶやきを増やしたりすることにつながった。

手立て(2)興味関心を引くでは、北海道の農業の特徴を捉えさせる際、全国の生産量のうち北海道が100%を占めている農産物である甜菜(てんさい)と沖縄県で多く栽培されているサトウキビを比較して考える場面を設けた。その際、導入において「甜菜」という漢字からどのような作物かを考えさせた。すると、すぐに「あまそう」という声が多くあがり、「砂糖の原料だ」という発言もあった。それを聞いた周りの児童は「へえ～！」と反応した。さらに、「沖縄ではサトウキビ！」という声もあがり、同じ砂糖の原料だがなぜ北海道でたくさん作られているのかなと問うと、「寒いから」「寒さとか気温差」とすぐにたくさんつぶやきが出てきた。片山・若松(2019)は、「子どもの興味・関心を引き出し、ワクワク感や『あっ、そうだったのか!』という感動をもたらす」と、「教室には、自ずと声が聞こえます」と述べている。児童の反応から、興味関心を引くことができたのではないかと考えられる。また、手立て(1)や(2)から、児童のつぶやきや反応が増えていったことでリラックスした雰囲気になり、上述したような児童が安心してつぶやける教室(阿久津2012)に近い環境ができたのではないかと考える。

B) 発言を活かす工夫

ここでは、児童から出てきた発言を上手く活かすことができなかつたため、発言を活かすことができなかつた場面の一例をTC記録(表5)に示し、その原因について考察する。上述した発言を引き出す工夫の手立て(2)に示した場面が続いて、児童から出てきた予想を板書し、教科書と資料集を用いて確かめさせた。ここでは発言を活かすため、児童の発言に対して丁寧に拾い復唱した。しかし、表5からわかるように、頻繁に発言を拾ってはいるが、それぞれの児童と教師の1対1の関係のまま進んでいる。児童の予想もさまざまなものが出ているが、次の活動では教科書と資料集から答えを探すという活動になっている。そのため、児童が予想したことと学習内容につながりがほとんどみられず、児童の様子からも知りたいという意欲があまりみられない。

これは、筆者が児童の発言を拾うということを意識しすぎた結果、児童の発言と教師の復唱が繰り返される単調なものになってしまったことが原因の一つとして考えられる。また、授業内容を「教えなければならぬ」という筆者の意識が強くなってしまったことで、児童の思考に合わせた活動ではなく、もともと用意していた教科書

表5 発言を活かすことができなかつた場面(5月)

キャッチ&レスポンスの段階	TC記録(○活動, ★全体の反応)	児童の反応と考察
段階②他の児童にも聞かせるため復唱して確認する	①なぜ北海道ではたくさん甜菜が採れるのか予想する。 G1:寒いところでよく育つ。 T:寒いところでよく育つ。寒いところで良く育つからかな～って思った人? G:半数以上が手を挙げる。 T:他にもあった? G2:面積が大きい。 T:面積が大きい。なるほど。確かに北海道… G3:土地が大きい。 T:他にもありそう? G4:冬でも土の中で育ってるから、そのまま育てることができる。 T:土の中から冬でも育てられる。こんな感じかな。みんなそれぞれ予想したと違うんだけど…。(教科書と資料集から調べるように促す)	
段階②他の児童にも聞かせるため復唱して確認する	②教科書と資料集の文章などから甜菜が多くつくられる理由を読み取る(1分程度)。 T:じゃあ、 <u>どんな風に書いてましたか</u> 。 G5:んーと、寒い土地でよく育つ。 T:寒い土地でよく育つ。みんなが予想してくれたのにあつたね。他にもあった?寒いから? ★ほとんど反応がない。教科書を開いたまま手が止まっている児童も数名いる。 G6:冬でもよく育つから? T:冬でも育つって書いてた? G6:んー関係ある? T:関係ある? ★静かになる。顔を上げていない児童が多い。	教科書や資料集から他の答えを探そうとするが見つからず困っているのではないかと考えられる
段階②他の児童にも聞かせるため復唱して確認する		Tの「どんな風に書いてましたか」という問いかけから教科書から答えを探すという活動になり、さらにTがG6の発言をそのまま復唱したため、児童は何を求められているか分からなくなっているのではないかと考えられる

で確認するという活動になってしまい、児童の発言を上手くつなぐことができなかつたと考えられる。片山・若松(2019)は、子どもが主人公になっている学びのためには、教師のスタンス(哲学)を大きく変える必要があり、「それは、子どもに知識を教授する存在から、子どもが知識を獲得するのを援ける存在へと転換すること」であるとしている。つまり、筆者の“教える”という意識を子どもの学びを“サポートする”という意識に変えていく必要があるといえる。そのため、9月実習では、子どもの思考に合わせながら臨機応変に発言や活動をつないでいくよう意識することにした。

(3) 9月実習(2022年度課題解決実習 9月26日~10月7日)

① 発言を活かす工夫の改善

9月実習では、児童の発言を活かす工夫の改善として、児童の発言を臨機応変に活かしていくため、授業に柔軟性を持たせることを特に意識して指導計画を立てた(表6)。授業の中心がブレないようにねらいはできるだけ一つに絞り、簡潔な言葉で書き出した。また、授業で行う活動や時間にはゆとりを持たせるようにした。第2時では、児童から問いを引き出す時間をつくり、それぞれの疑問を共有させることで児童に学習内容への興味関心を引き、各時間に児童の問いと学習内容をつなげるようにした。そして、1時間の活動と単元全体につながりを持たせることをより意識することで、児童の発言や問いを幅広く活かせるようにした。

表6 9月実習の指導計画

次 時	ねらい	B学級の発言を引き出す手立て(関連する視点)	
問 題 を つ か む	1	・身の回りの工業製品が、人々の手によって改良され、暮らしを支えてきたことを捉える ・自動車が生産の中心となる工業製品として発展してきたことを知る	・工業製品の進化をクイズにすることで、関心を持たせ、発言しやすい場面をつくる(視点①)
	2	・自動車生産について問いを出し、学習の見通しをもつ	・それぞれが違った視点を持っていること、疑問を出すことで全体の学びにつながることを意識させる(視点②)
	3	・大量生産を支えている効率の良い生産の工夫や努力について捉える	・各作業のカラー写真を児童に配布し、作業の様子をじっくり見たり並べ替えて作業の順番を予想したりすることで考えが持てるようにする(視点①)
	4	・生産に込められた人々の工夫や努力などについて捉える	・普段あまり発表しない児童を指名し、黒板に書くという形式の発表機会を設けることで自信を持たせる(視点③)
問 題 を 解 く	5	・自動車工場と関連工場との関係や関連工場の役割について捉える	・自動車にはたくさんの部品が使われていることをイメージさせる際、自動車の部品を黒板に書き出す活動を設け発言する機会を増やす。
	6	・出荷に関わる人たちの工夫や努力について捉える	・完成した車がどのように運ばれているかを予想する時間を長く設けることで、見直しを持たせ考えの形成につなげる(視点①)
	7	・自動車の開発にはたくさんの人が関わっていることを捉える	・ニーズという言葉の意味理解を促し、児童が自由に発言できる機会を作るため、みんなの“あったらいいな”という機能を開問(視点①)
ま と め	・今の自動車づくりに求められていることを捉える 自動車には、さまざまな人が関わっている。人々のニーズに合わせて新しい機能や車を開発している。	・グループでの活動を設けることで少人数の聞き手に安心して発言できる機会をつくる(視点②) ・各時間にまとめてきたキーワードをもとにして書かせることで、学びを実感させる(視点③)	

② 児童の反応と考察

A) 発言を引き出す工夫

発言を引き出す工夫は、視点①と②を意識して手立てを取り入れた。5月に比べて児童の様子を見ながら落ち着いて授業を進めることができたため、特に肯定的な言葉かけ(発言を引き出す視点②)を意識して行うことができた。また、授業後にビデオを見返すと、児童の発言に対して「いいね〜」「すごい」など5月にはあまりみられなかった言葉が筆者の口からよく出るようになっていた。さらに、このような関わりの後、児童の発言がどんどん増え、他者の発言に対して「いいね〜」という言葉での反応を返す児童も増えていった。5月実習に比べても、児童にとってより発言しやすい状況ができていたのではないかと考えられる。また、第7時では、グループ活動前に説明をした後、児童に質問があるかどうか尋ねた。筆者が「今質問してくれたらみんなのためになるかもしれないよ」と言うと、一人の児童(A児)から「ニーズってどういう意味なんですか」と質問が挙がった。A児は、それまでの授業において、全体の場で一度も発言することはなく、教室の後方で隣の児童とおしゃべりをしていることが多かった。しかし、この場面で全体の場で質問することができたことは、A児が発言してみようと意欲を持ったからであると捉えられる。また、教室後方で授業を観察していた主担当教員の話から、その後A児は隣の児童に授業に参加するよう声をかけていたという。肯定的な反応や言葉かけがA児の発言意欲や授業に参加しようとする姿勢につながったのではないかと考える。

B) 発言を活かす工夫

ねらいを絞り授業に柔軟性を持たせたことで、児童の発言を学習内容や他の児童の発言へとつなげ活かすことができた。ねらいを意識して発言を授業に活かすことができたと考えられる場面の一例として、

第6時「完成した自動車のゆくえ」の導入場面をTC記録に示す(表7)。完成した自動車を販売店に運ぶ際にどのように運んでいるか予想させる場面である。児童の発言を拾う際、児童が何を言おうとしているのか意識して聞くようにした。C2の発言は、真意が十分に読み取れなかったため、「～ということ？」などと聞き返すことで発言の真意を明確にしていくことができた。また、児童の発言の真意を明らかにしていくと、その考えが他の児童の発言へとつながり、反対意見やその理由、中間の考えなどが出てきた。このことから、段階④の子どもの考えた真意を明らかにし活かしていったことで、児童が考えを膨らませながら主体的に授業に参加できたのではないかと考えられる。また、予想の場面でさまざまな意見とその理由を十分に交流させた。その後の児童の様子から、児童に合わせて時間を取り、次の活動へつないだことで児童が意欲的に参加する姿勢につながったと考えられる。

このような場面から、発言を活かすうえで重要なことは、ねらいを明確にし、授業や活動を柔軟にこなげること常を意識することであるとわかった。さらに、その際児童の発言の真意を明らかにしたうえでつないでいくことが必要であると考えられる。

C) 事後アンケート

最後の授業後、出席していた31名を対象にアンケートを行い、授業のなかで発言しやすかった場面を尋ねた。内容別に39個の回答が得られた。それらをカテゴリ分けし、影響していると考えられる要因を手立ての視点ごとに整理した(表8)。視点①から③までそれぞれの手立てに関連すると思われる記述がみられる。特に、「受容的な姿勢」や「言葉がけ」の項目にみられるように、肯定的な反応や教師側から積極的に言葉がけを行ったりしたことに対する具体的な記述があった。児童のアンケートの記述

表7 発言を活かすことができた場面(9月)

発言を引き出す手立て(一画面)キヤッチ&リスボンスの段階	TC記録(〇活動、大全体の反応)	児童の反応と考察
<p>・視点①自動車生産の流れの写真と販売店の写真を開いて提示する。(→完成車と販売店を視覚的に示し、イメージを持たせるため)</p> <p>段階④2の発言の真意を明らかにしようと試みる</p> <p>C2に真意を尋ねる</p>	<p>〇完成した自動車がどのようにして販売店まで運ばれるか予想する。</p> <p>C1: 船で運ばれて、地に行つて、トラックで運ばれてると思います。</p> <p>T: (丁寧に確認しながら返答する)</p> <p>C2: 船、港はあつてるけど、自分で、あ、車で走ってるのではない。</p> <p>T: 車で走ってるのではない、どうする?じゃあ、車も走ってそう?</p> <p>C2: トラックに乗らない車は道具で解けるから…。</p> <p>T: 置いてたら解けるから車自体も動かすんじゃないかってこと?</p> <p>C3: いやいやいやいや。</p> <p>C4: 置きすぎだろ。別のトラックがあるだろ。</p> <p>T: まってよ、車を直接動かすってこと?</p> <p>C2: (頷く)</p> <p>T: 「車を直接動かす」と板書する</p> <p>T: じゃあ、今の二人の意見も聞きながら、他に。(つぶやきや反応から)車直接動かさしちやあだめだよって言う意見の人もある?</p> <p>C3: だって、商品なんですよ。傷つけちゃダメじゃん。</p> <p>T: 傷つけちゃダメ。</p> <p>C5: (Tに話しかける)</p> <p>T: 短いときだけ乗せる(復唱)。あ、動かす?</p> <p>C5: (うなずく)</p> <p>(全体に返す)短い距離だけ。傷つけちゃダメ。</p> <p>C6: うん。商品だから。</p> <p>★自動車直接動かすかどうかで議論になりざわつく。</p> <p>T: (板書した予想を指さし出てきた考えを確認しながら)たくさん予想してもらったんだけど…。</p> <p>C7: (Tに話しかける)</p> <p>T: 飛行機もあるのかな。飛行機も悪いところね。</p> <p>C3: 飛行機って海外…。てかさ、重すぎて落ちる。</p> <p>C8: そう!重すぎて落ちると思う!</p> <p>★自分の考えをつぶやく児童が多くみられる。</p>	<p>・C2の発言に対して反論する様子から他者の考えに対する自分の考えを伝えようとする意欲がうかがえる</p> <p>・完成したばかりの自動車ということ意識してC2の考えに反論していると考えられる</p>
<p>段階④他の児童にも聞かせるため復唱して確認する</p>	<p>T: 今から、自動車の輸送の様子が示された地図を配るので、これを見てどんなのが使われているのか確認してみてください。(自動車輸送の様子を示した地図を配る)</p> <p>★配られた地図をじっくり見たり近くの人と地図を見ながら話したりする。</p> <p>C3: 当たってる～</p>	<p>・つぶやきが増えざわつく様子から、自分の考えを持ち伝えようとする意欲を持っていることがうかがえる</p> <p>・Tの近くにいた書眼あまり発表はしない児童(C7)が攻め陣に移ろうとするのをささえたり話しかける様子から、C7にとつて発言しやすい状況であり、自分の考えを伝えたいという意欲があったと考えられる</p>
<p>・視点①児童の発言が増え着いたところで資料を配る(→予想を持たせるため、十分に時間を取る)</p>	<p>T: 今から、自動車の輸送の様子が示された地図を配るので、これを見てどんなのが使われているのか確認してみてください。(自動車輸送の様子を示した地図を配る)</p> <p>★配られた地図をじっくり見たり近くの人と地図を見ながら話したりする。</p> <p>C3: 当たってる～</p>	<p>・地図に興味を示したり、積極的に他の児童と確認しながら話したり、自分の予想と照らし合わせて確認したりする様子から、意欲的に取り組んでいると考えられる</p>

表8 事後アンケートの結果

手立て	カテゴリ	個数	発言しやすかった場面(例)
重視する視点①	簡単な答えを求められる受け	6	・材料はどのようなものがある?で自分でも発言しやすかった ・簡単な質問が来たとき
	考えを持つ	2	・先生に質問されて、その答えとか、自分の意見を持っているときに発言しやすかった
重視する視点②	聞き手の人数	10	・グループで部品や安全などを付箋紙に書いて仲間分けをしたとき ・グループのみんなで発表するとき、理由はあまり人数が多くなって、少し緊張しないから
	受容的な姿勢	6	・発表しなくても、先生が言葉を拾ってくれるから言いやすかった ・かな先生が回ってくれて「お～すごい!」などと言ってくれたのでうれしかったし、自信が持てた
	言葉がけ	4	・「あつたら、手を挙げないでどんどん言って」と言っていたとき ・かな先生がまちがえてもいいから発表してと言ったとき
重視する視点③	自信・自己	4	・ペアで話し合ったとき(グループ)の後の発表
	指名	3	・かな先生が「〇〇さんはどう?」と言ったときに発言しやすかった
その他	聞く姿勢	1	・静かにきいてくれるとき
	周りの声	1	・みんなが話しているとき(発表しているときなど)
	発表が得意	2	・全部、授業中静かなとき以外は、全て発言しやすかった、理由は自分の考えはどんなときでも言っちゃうタイプだから

から、発言を引き出すために行った手立ては、受容されているなどといった児童の実感となり、発言に影響を及ぼしたと考える。

5. おわりに

本研究では、発言を引き出す工夫と活かす工夫を取り入れることで児童が主体となり学びに向かう授業を目指した。

発言を引き出す工夫では、課題発見実習を通して整理した視点をもとに児童の実態に合わせた手立てを取り入れていった。特に、9月の実習では、取り入れた手立ての効果が子どもの記述にも表れた。視点を有効に活用することができたと考える。発言を活かす工夫では、ねらいを絞り、授業に柔軟性を持たせたことで発言を活かすことができ、児童が主体的に学びに向かう姿がみられた。また、児童の発言を活かしていく過程で、他の児童の新たな気づきや考えの形成につながりつづやきが広がる様子が見られた。このことから、発言を活かすことは発言を引き出すことにもつながると考えられる。また、児童の発言の真意を明らかにすることも重要であるとわかった。教師が児童の発言の真意を明らかにしながら拾いねらいにつなげていくことで、発言が活かされ、さらに新たな発言が引き出され、それを繰り返すことによって児童が主体的にねらいに向かい学ぶことができるのではないかと考える (図1)。

さらに、アンケート調査の感想欄から、自動車の生産工程を説明したものや、「今ある新しい車は、ニーズをもとにして、開発されたことが分かった。」などと具体的に分かったことを記述する回答が多くみられた。このようなことから、児童が授業の内容をしっかりと理解していることが伺える。また、「自動車をつくる時に必要な道具や物を作る関連工場についても知りたい。」という回答に見られる“知りたい”という言葉から、意欲を持って学習に取り組むことができたのではないかと考えられる。他の学級においても、家庭学習ノートに自分の家の自動車について調べたことをまとめてくる児童や「明日空飛ぶ車について調べてくるね」と言いに来た児童がいた。このような姿からも、児童が主体的に学ぼうとする様子がうかがえた。

本研究では、発言をためらう児童の姿から出発し、発言を引き出すことを重視した授業づくりを進めてきた。各実習を通して、筆者の授業観も少しずつ変化し、児童が発言したいと思えるような活動場面をつくることや、ねらいに沿った発言が出るよう発問を工夫することなどがより重要になってくると考えるようになった。今後は、児童が発言したいと思える場づくりやねらいにつながる発言をどう引き出すか意識し実践していきたい。

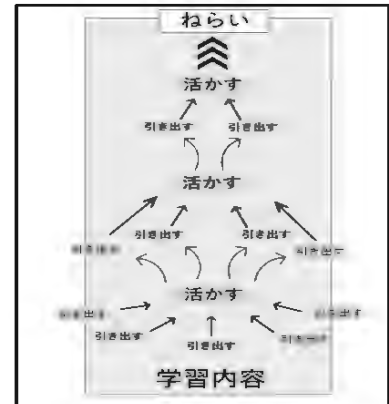


図1 発言を引き出し活かす工夫とねらいに向かう流れ

引用文献

- 阿久津まどか, 2012, “第二部プログラム3. 4”, 青木一, 『達人に学ぶ授業力—10年目までに身に付ける授業の4力「よぢから」—』千葉教育センター, 79-86.
- 石井登志夫, 2008, 「書かせることで発言を引き出す授業の記録『落下中の重力』」『物理教育』日本物理教育学会, 56(4): 284-288.
- 片山紀子・若松俊介, 2019, 『授業ファシリテート入門』ジダイ社, 80, 208, 34, 15.
- 宮坂瑠子, 1972, 「視覚的教具・教材の教授学的意義についての若干の考察」『教育学研究』一般社団法人日本教育学会, 39(2): 62-71.
- 志水廣・神田勝哉, 2000, 「算数科：子供の発言に対する教師のCR能力の研究」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』愛知教育大学教育実践総合センター, 3: 145-151.